誰がために山車は行く

――神様、仏様、殿様、お客様――

中里亮平

1　はじめに

本稿は角館のお祭りを事例に、誰が為に山車は行く、のかという素朴な問いについて考察することを目的とする。角館のお祭りは過去にも様々な研究者が研究の対象としてきた[1)]。しかし、角館のお祭りは歴史的にも現在の様式的にも大変複雑であり、解明できていない点も多いため、この祭礼を通して新たに見出すことのできる点も多いと思われる。

角館のお祭りは、9 月 7、8、9 日に秋田県仙北市角館地区で行われる祭礼である。神明社参拝、薬師堂参拝、佐竹上覧、観光ぶっつけ、本番という 5 つの要素が祭礼期間中に行うべき目的とされ山車の運行ルート決定に重要な影響を与えるのであるが、この 5 つは重要度や成立の経緯、山車ごとの認識のされ方に違いがある。

ここに山車同士が向かい合った時の交渉や張番とのやり取りなどが加わり、角館のお祭りを大変複雑なものにしている。また、祭礼の内部の問題だけではなく、警察による時間規制や事故防止への圧力は年々強まり、参加者の望む角館の祭りを継続することは困難になってきている。

この複雑さと困難さの中、それでも山車は行く。誰が為に行くのか。神様？仏様？殿様？お客様？あるいは？こうした問題について考えることは祭礼研究の進展に寄与するとともに、角館のお祭りの特性を明らかにすることにもつながるだろう。本稿は、今この山車は何の目的でどこを目指しているのか、という素朴な参加者の立場から角館のお祭りについての基本的な情報を整理するものである[2)]。

2　角館のお祭り概要

2.1　角館外観

角館は秋田県の中央部に位置する。平成 17 年に田沢湖町、西木村と合併し、仙北市の一部となった。旧角館町の人口は約 14000 人ほどであった。

角館は、芦名氏、佐竹氏 15000 石の城下町であり、古くから仙北地方の政治、経済、文化の中心地として栄えた。町は桧内川に沿って南北に長く伸び、北半分が内町と呼ばれる侍町、南半分が外町と呼ばれる町人町となっており、両者の間は火除地によって区切られていた。現在でも建設当時の古い町割りをそのまま残しており、特に内町は武家屋敷の景観をとどめ、伝統的建造物保存地区にも指定されている。

平成 9 年に秋田新幹線が開通したこともあり、角館は武家町と桜並木、そして角館のお祭りを中心に観光地としても名高い。年間 200 万人の観光客が訪れており、花見の時期は 100 万人以上、角館のお祭りの時期も 20 万人以上の来訪数を記録している。

2.2　角館のお祭り外観

角館のお祭りは 9 月 7、8、9 日に行われる角館の鎮守神明社と薬師堂の秋祭りである。もともとは別の日程で別々の祭礼が開催されていたが、明治時代になり神仏分離の影響で双方の祭礼が同時に行われることとなった。明治 13 年以降は 9 月 7、8 日が神明社の、8、9 日が薬師堂の祭日となっている。

もともとの氏子圏は旧角館町内であるが、それ以外の周辺地域からも続々と新しい丁内も参加しており、現在は 18 台の山車が出る祭礼となっている。山車を運営するのは基本的には、江戸時代からの区分で分けられた丁内であり、それぞれに張番と呼ばれる会所を設けて自丁内を管理している。この張番は強い権力を有しており、張番の許可がないと山車はその丁内に入ることができない。現在では複数の丁内で合同して山車を出しているところや丁内の若者が主催して山車を出している丁内も多くなってきている。

山車は祭礼の期間中に神明社、薬師堂へ参拝するほか、佐竹上覧、観光ぶっつけなどの目的を達成しながら、角館の町中を移動する。角館の町中は道幅が狭く山車が向かい合うとどちらかが道を譲らなければ交差することができない。そこで行われるのが交渉である。

交渉では双方が定められた作法に従って、それぞれの主張を交わし、相手に道を譲らせようとする。長い時は数時間もの間交渉が続けられることとなるが、ここで決着がつかないと本番が始まることとなる。

本番の形態は時代ごとに大きく変化しているが、4 トンを超える山車が正面からぶつかりあい、相手を押しのけ、払いのけようとする大変に迫力あるものとなっている。数時間に渡って続けられる本番では、自分たちの山車の特性や参加している人数、周辺の環境などに応じた様々な戦術が駆使され、また山車自体も毎年改良が加えられている。勝敗については様々な規定があるが、けが人が出たり、公共物や民家が破壊されたりするとそこで中止となる。この本番の後も交渉が行われ、ようやく山車が交差することとなる。

山車同士には友好丁内や因縁のある丁内などがあり、また自分の山車が有利に戦える環境で相手を迎え討とうとするなど、様々な戦略が本番をめぐって駆使され、これが角館のお祭りの特徴の 1 つともなっている。

2.3　角館のお祭りの歴史 [3)]

2.3.1　明治維新以前の角館のお祭り

城下町としての角館は応永年間に戸沢氏によって開発され、その後関ケ原合戦後国替えで秋田へと転封となった佐竹氏によって統治されることとなった。武家が住む内町と町人が住む外町（横町・上新町・岩瀬町・下新町・中町・下中町・七日町・西勝楽町・下岩瀬町の 9 丁内）に分かれている。

現在の角館のお祭りのルーツとなったとされる薬師堂の祭礼がいつ始まったのかについて正確なことは分かっていない。佐竹北家の『北家日記』内に享保 17 年に祭礼の期日を変

更したという記録が残っているのが、最も古いものである。同じく『北家日記』では寛政 11 年に「勝楽町薬師祭礼に付き、町々より山都合四十ばかり表門より見る」という記録がある。文政元年には「祭山」「踊山」、天保 9 年には「祭り山廿日町は踊山、外の丁は吊り山」という記録が残されている。

これらの記録から明治維新以前の角館のお祭りについては、薬師堂の祭礼として始まったこと、町民主体の祭礼でありそれを武家や殿様が見物することがあったこと、「祭山」「踊山」「吊り山」といった形式の山車を中心とした祭礼であったことなどが分かる。

薬師堂は正式な名称は成就院薬師堂であり、戸沢氏が角館を統治していた時代に勝楽村の産土として信仰を集めていたとされている。真言宗の寺院智山派に属し、佐竹家による角館の町割り変更によって現在の場所へと移されたものである。

町民主体の祭礼であったことについては、角館の外町がたびたび火災にあって文書類が消失しており、その詳細について分からないことが多い。丁内で出すオオヤマと有力な商人が個人で出すコヤマというものがあったこと、また昭和 41 年に内町である現在の北部丁内が祭礼に山車を出す際に、お祭りは外町の人がやるもので内町は見るものだと反対があったことなどを合わせて考えると外町の町人主体の祭礼であったことは確かであろう。

山車の形式について、「祭山」「踊り山」「吊り山」のそれぞれがどのようなものであったのかについては図像などの資料が残っていないため正確なことは分からない。しかし、外町から内町へと山車を見せに行ったという事実からはこの時代の山車もなんらかの手段で移動するものであったことは確かである。また、時代がずれるが昭和 7 年に発行された『日本民俗芸術大観第一集』に飾山囃子の記録として残されている絵画がある。ここには二本の棒の上に岩、滝、樹木、人形をあしらった巨大な山車の前面に囃子方と踊り子が乗ったものを 4、50 人の人数で担ぎ、それを周囲から綱で支えている様子が描かれている。山車は描かれた人間との比較から考えると 10 メートルを超える高さである。さらに、大正時代初期に作られた原寸の 20 分の 1 の山車のミニチュアの構造や大正時代になって登場し始める現在のような車輪を有する山車を曳き山と呼びそれ以前の山車を担ぎ山として区別したことを合わせて考えれば、人が担いで移動するタイプの山車が運行されていたことは確かだろう。

2.3.2　角館のお祭りと明治維新

戊辰戦争で大きな被害を受けることはなかった角館だが、明治 3 年から神仏分離政策が進められていくこととなる。秋田県は明治 3 年、仏語で神号を称する呼称廃止、社前に仏具を置くことなどの禁止を布告し、薬師堂は勝楽神社と名称を変えることとなった。明治 7 年の『北家日記』に「明治七年九月十七日未牌神明社之神輿相廻於表門一見、是迄神明神輿六月十五日廻、勝楽町薬師神輿八月六日相廻リ候所、薬師ハ廃、神明之神輿今日ニナル」との記述があり、薬師堂が廃止され、その祭礼の代わりに本来の日付を変更して神明社の祭礼が行われたことが分かる。明治 11 年には「旧暦八月六日ニ付神明社ノ神輿が廻リ、岩

瀬町、下新町、下仲町、勝楽町、七日町より飾山一台ずつ、また置人形モ各丁ニ」との記述から神明社の祭礼となってからも山車が出され、それまで通りの祭礼が行われていた様子がうかがえる。

大きな転機となったのは明治 13 年である。「明治十三年八月三十日、角館町旧鎮守勝楽町薬師尊之仏輿今日より廻候事ニ此度御指令ニ相成候段弥勒院届ニ候」との記述があり、またその前日に神明社の神輿が巡行したという記述があることから、明治 13 年までには勝楽神社が薬師堂へと戻ったこと、それを期に薬師堂の祭礼と神明社の祭礼を同時期に行う現在の角館のお祭りの様式が誕生したことが分かる。

2.3.3　現在までの角館のお祭り

明治維新後も角館のお祭りは様々な変化を遂げている。ここでは、山車の変化、参加者の変化という 2 点から整理していく。

山車の変化で最も大きいのが、担ぎ山から曳山へと変化したことである。明治 25 年の西勝楽の山車が最初に曳山となり、その後、徐々に担ぎ山から曳山へ変える丁内が増え、明治 42 年を最後に担ぎ山は見られなくなる。担ぎ山の巨大化と電線の普及がその原因である。また、曳山が中心となることで現在の角館のお祭りの代名詞の 1 つともいえるぶっつけが行われるようになる。ぶっつけが行われるようになったことで山車には、車輪が工夫されたりや接続部がボルトになるなど様々な改良が加えられていった。さらに、昭和 26 年の事件を機に更なる変化が起きることになるが、これについては後述することとする。

参加者の変化については、昭和 6 年に山根が角館の旧丁内以外の地域から初めて山車を出したことが現在の角館のお祭りを形作る上での大きな変化であるといえる。景気や丁内の事情によって山車を出さない丁内がある年はあったが、基本的には横町、上新町、岩瀬町、下新町、下岩瀬、中町、下中町、七日町、西勝楽という 9 つの旧丁内だけのものであった角館のお祭りがその外部に向けて開かれていくきっかけとなったのである。その後、昭和 14 年の岩瀬、昭和 24 年の旧東部の参加など新規参加が続く中、旧丁内では昭和 32 年の中町、下中町が合流して中央通りとなったように人口減少の影響で合同して山車を出す丁内が登場する。また、昭和 30 年代後半には菅沢、西部、北部の参加、東部の駅通りと駅前への分裂、岩瀬、下新町、下岩瀬合同での本町通りの誕生など、角館中心部の人口減少と周辺地域の人口増加の影響が大きくなっていく。次に参加丁内の増加がみられるのは平成 3 年の重要無形民俗文化財指定の前後である。平成 8 年の川原町の参加により、現在の 18 台の山車が出そろうこととなるが、その一方で旧丁内では人口減少が続き、参加者の友人関係などをたどって横手や大曲、秋田などから参加者を集める丁内が増え、純粋に丁内に在住する若者は参加者全体人数の 10 パーセント前後となる丁内なども出ている状況である。

3　5 つの要素

現在の角館のお祭りを角館のお祭り足らしめているものは何か。本番と交渉、張番、警察との関係、山車、飾山囃子と様々な要素が考えられる。ここでは、神明社参拝、薬師堂参拝、佐竹上覧、観光ぶっつけ、本番という 5 つの要素に注目し、それについて整理する(4)。

3.1　神明社参拝

神明社は元和 6 年の新たな角館城下移転とともに現在の位置へと移動し、明治 6 年に郷社となり、明治 45 年に無格社を合祀して今日へ至っている。祭神は天照大御神・加具土神他 10 柱。祭礼期間中、9 月 7、8 日は神明社のお祭りとなっている。7 日のうちにほとんどの山車は参拝を済ませる。8 日に神輿が角館の町を巡行するが、行き会った山車はどんな状況であろうとも運行を止めて道をあけ、行き過ぎるまで待たなければならない。

神明社参拝を終えなければ、山車はただの車、であるため、ぶっつけなどは行われない。どんな事情があろうとも絶対に参拝しなければいけない欠かすことのできない重要なものであると認識されており、実際に神明社参拝を行わなかったという山車はほとんど存在しないと思われる。神明社参拝の際は山車を鳥居正面に向けて、囃子を 2 曲奉納する。その間に若者は拝殿前まで登り、お祓いを受ける。また、その際に若者は神明社の焼印が入った木札を購入し、首からぶら下げるのが一般的である。

3.2　薬師堂参拝

薬師堂の正式名称は、真言宗智山派勝楽山成就院で、本尊は薬師瑠璃光如来である。開基は不明であるが、今の勝楽町が角館の一部ではなく独立した勝楽村であった頃から村の鎮守として峰の薬師と呼ばれていたという。戸沢能登守が眼病を患った時にこの薬師に祈願したところ完治したため、城内に勧請したとされている。角館の城主が佐竹氏に代わった後も、角館の住民から信仰を集めていた。

8、9 日は薬師堂の祭礼であり、山車が参拝に訪れる。7 日の神明社参拝と異なり、参道が一本道でないため、他の山車と向き合うことも多く予定した時間通りに参拝できるわけではない。また 8 日には佐竹上覧や観光ぶっつけなどの行事もあり、山車が複雑な動きをするため、8 日に間に合わず 9 日に参拝する山車もある。神明社参拝と同じように絶対に欠かすことのできない重要なものとして認識されているが、上記の理由によりまれに祭礼期間中に薬師堂参拝を行うことのできない山車も出ることがある。そうした山車の責任者はしっかりした曳き回しができなかったと後悔することになるという。

薬師堂参拝では、山車を鳥居正面に向けて、囃子を 2 曲奉納する。その間に若者は薬師堂前に集り、お祓いを受ける。薬師堂参拝は神明社参拝と同じように欠かすことのできない重要なものであるため、張番との交渉でも薬師堂参拝が入丁の理由である場合、許可が出やすいとされている。

3.3　佐竹上覧

佐竹上覧は 8 日に行われ、北部丁内に設けられた佐竹上覧の会場まで山車を運行させ、佐竹家当主の前で囃子を 2 曲演じるものである。この場において囃子のコンクールの審査も行われる。現在の佐竹家当主は北部丁内出身の現秋田県知事でもある。現在の形態で佐竹上覧が行われるようになったのはそう古いことではない。佐竹家があった場所まで山車を運行し、現当主の母親などに見てもらったものだと話す人は多い。実際に上覧の場所は移動しており、また当主が見届けるというものでもなかったようである。しかし、「曳山は三日間の祭典中に神明社、薬師堂に参拝及び佐竹さんへお見せに上がり、各丁内張番（11～13 丁内）へは必ずお見せしながら同じ道を通らないようにして無事丁内に収めることが立派な曳回しをしたと言われてきた」（角館町他　21）というように、佐竹上覧は神明社参拝、薬師堂参拝に続く欠かすことのできない重要なものであるとみなされてきたことは確かである。上り山[5]の条件に佐竹上覧はあげられていることもそれを証明している。

佐竹上覧は午前 10 時から午後 5 時 30 分までと時間が定められており、それを過ぎると行うことができない。また、上覧場所までは幅は広いものの一本道であり、何台もの山車と交差をしなければ町中まで戻ることができない。もちろん、上覧を終えていれば下り山であり、交差する山は上り山であるため、優先権がはっきりしており、大きなもめごとに発展することは少ないが、町中へ戻るために時間がかかることは確かである。こうした点とさらに「角館のお祭りは神明社と薬師堂のお祭りである」という認識から佐竹上覧を欠かすことのできない重要なものであると認めず、これを行わない山車もいくつか存在する。

3.4　観光ぶっつけ

観光ぶっつけは、観光協会が主導して、時間と場所、相手が指定されて行われるぶっつけである。参加者は本番と区別して「八百長」と表現している。現在は責任者会議の場で責任者同士が話し合い、時間と場所を決めて行っている。そのため、友好的な関係にある山車同士が相手になることが多く、大きなもめごとなどは発生しない。8 日の午後から予定が組まれ、参加すると観光協会から報酬が出るが、絶対に参加しないといけない行事ではない。そのため、自分たちの望む曳き回しを行うためにあえて参加しない山車もある。また、神事ではないという理由で張番への交渉理由として「観光ぶっつけに行くので通してください」と言っても通じないことが多いという。

始まる前、そして交差する際に交渉は行われるが大きくこじれたり、長時間かかることは少ない。山車によっては樽酒を割り、飲み交わすなど友好的な雰囲気がただよう。場所は、横町十文字、郵便局前、秋田銀行前など観光客が多く集まることができる場所が選ばれる。時間は午後 6 時頃から始まり、最後は午後 10 時頃に終わり、全部で 5、6 回行われるのが一般的である。時間の指定がされており、山車側もその時間に間に合うように移動するのだが、他の山車の位置や混み具合などによって時間通りに始められないという事態も発生する。1 時間以内に到着できなかった場合は中止ということになる。たいていは 3 回ずつを 3 セット行う。勢いをつけて正面から激しくぶつけるため、衝撃も大きい。しかし、

本番と違い山車を持ち上げたり、激しく振ったりすることはない。また、道具⑹などを取り付けることもない。

写真１　観光ぶっつけ

正面から山車をぶつけ合い、すぐに戻すということ儀礼的に繰り返す

3.5　本番

建前上向かい合った山車同士の交渉決裂の結果行われるぶっつけである。観光ぶっつけが時間、場所、相手の決まったものであるのに対し、いつどこで始まるかは決まっていない。本番に関して特に重要な変化をもたらしたのは、昭和 26 年の事件である。それまでの本番は現在の観光ぶっつけのように山車を正面からぶつけあい、相手を押しのけるという戦い方であった。しかし、昭和 26 年の西勝楽と岩瀬の本番中、偶然、岩瀬の山車が相手に乗り上げてしまい、相手側の山車が破損するという事件が起こった。これは完全に事故であったのだが、本番にとって画期的なできごととなった。これ以後、徐々にではあるが、山車の正面を持ちあげ、相手の山車とぶつけ合う本番が定着していくことなる。

前面を持ち上げる本番が定着するにしたがって、山車自体にも様々な変化が加えられるようになる。材木が軽い杉から丈夫な楢へと変わったこと、材木の接続が縄からボルトへと変わったこと、車輪に鉄の輪を締める強化が行われたこと、効率よく山車を持ち上げるために前輪と後輪の距離が変わったこと、山車を持ち上げた際に地面に触れる後部の強化が行われたこと、など多岐にわたる。

また、ただ山車の前面を持ち上げてぶつけ合うだけでなく、その前面を激しく動かすことで相手を振り落す戦法やあえて相手を上に乗せてから動く戦法、いったん後ろへ後退することで相手を振りほどきそれから前進する戦法など山車ごとに自分たちの山車の構造や参加人数、本番が行われる場所などを考慮した様々な戦法も導入されるようになった。激しく前面を動かすために山車後部にハネブリと呼ばれる長い棒を複数設置する山車が多いが、さらにここ 10 年ほどの間にスーパーテンボウと呼ばれる 1 本の長いハネブリだけを設置する山車も増えている。「角館のお祭りの山車は戦うものだから」「戦車みたいなものだから」という語りがあるように、山車ごとに、そして同じ山車の中でも年ごとに様々な改良が加えられ、より強くなっていくのが角館の山車の特徴の 1 つであるということができるだろう。

本番は始まる前にも長い交渉が行われ、観光客などからはいつ始まるんだと言う声がも

れることもある。一般に本番で使用する数々の道具やハネブリ、スーパーテンボウの設置が行われれば、本番が近いと判断することができるが、そうした準備も行われないままに突然本番が始まることもある。

1 度始まった本番は数時間に渡ることも多い。器物の破損、けが人の発生、人形の破損、囃子の中止、張番の仲裁、一方の山車が決定的な敗北を認めることなどで終了するが、このような明確な形で本番が終了することは実はそう多くはない。本番が始まった地点よりもどれだけ相手側に押し込めることができたかという点は本番終了後の交渉の材料になるが、決定的なものであるということはできない。

本番はある意味で角館のお祭りの華としてポスターなどを通じて広く宣伝されていることもあり、観光客もこれを見ることを望んでいる。若者もまたこれに参加することを楽しみにしており、本番がない年が続くと他の山車へついてしまう若者もいたという。責任者は若者が満足するよう本番を達成してたいと考えるが、あくまでも本番は目的ではなく手段であるとされている。

向かい合った山車がどのように交差するのか、どちらがどれだけ山車を寄せ、どちらが移動して通り過ぎるのか、こういった本番が発生しない際の交差とそれに伴う交渉の延長線上にあり、交渉がもつれた結果、仕方なく発生するというのが本番の本来の姿である。そのため、いかに本番を優勢に運んでいても、交渉の際に理屈で負けて道を譲らなければならないという事態も発生する可能性がある。交差が終わるまでの長い交渉の一場面が本番なのであるが、もちろんこれは建前上のものであることも確かである。

写真 2　本番

山車の全面を持ち上げ、ぶつけ合う。様々な道具が使用され、数時間に渡って激しく争う。

3.6　それぞれの重要さと意味

【表 1】　角館のお祭りと 5 つの要素

	歴史	日程	神事・行事	重要性	対象
神明社参拝	明治 4 年から	7 日	神事	絶対に必要	神様
薬師堂参拝	祭礼開始時から	8、9 日	神事	絶対に必要	仏様
佐竹上覧	昭和 48 年に復活	8 日	行事	山車ごとに判断	殿様
観光ぶっつけ	昭和 37 年に開始	8 日	行事	山車ごとに判断	お客様
本番	明治中盤から定着	9 日	行事	建前上は不要	俺様？ 皆様？

5 つの要素を歴史、日程、神事であるか行事であるか、重要性、対象とされる存在の 5 項目から整理したのが【表 1】である。

さてここから、誰が為に山車は行くのか、という問いについて、「神明社参拝と薬師堂参拝は神様・仏様という聖なるもののために、佐竹上覧は殿様という歴史的権威のために、観光ぶっつけはお客様という経済的な目的のために、行われている。経済的な目的が加わっている点が現代的であるが、聖なるもの、歴史的権威、経済という重要度の序列は、誰が為に山車は行く、のかという問いの答えになるだろう」という結論を出すことも可能である。

しかし、これではあまり面白くないし、角館のお祭りはそう簡単なものではない。山車は 18 台あり、それぞれがそれぞれの目的を果たすために山車同士が交差することの難しい狭い町中を動き回っており、その町中はさらに張番によって細分化され管理されているうえに、4 つの要素とは異なるがしかし重要な本番という要素が存在し、それに有利な場所や位置、そして何より相手を探さなければならず、それなのに警察はますます管理を強め時間規制を守らせようとしているのである。次にある場面を想定し、そこから山車が動き出す前にどのような判断があるのか、そして誰が為に山車は動き出すのかを考えてみたい。

4　誰が為に山車は？

4.1　ある場面

例えば 9 月 8 日の夕方 6 時頃佐竹上覧を終えて、北部丁内から出てきた山車を例としてみよう。一体何を考え、誰が為に山車は行く、のか。

第一に、4 つの要素のうちのまだ達成していない、薬師堂参拝、観光ぶっつけのことが想定される。薬師堂参拝を 8 日のうちに終えてしまえば、9 日は自由な曳き回しを行い、望んだ相手と有利な場所で本番をすることができるかもしれない。しかし、観光ぶっつけの予定があるのならば、そういうわけにもいかない。1 時間以上遅刻すれば観光ぶっつけは中止になってしまい、報酬が入らないだけでなく相手にも多大な迷惑をかけてしまうので急いで観光ぶっつけが行われる場所まで移動しなければならない。また、観光ぶっつけが始まれば終了まで 1 時間以上の間その道はふさがってしまうため、他の山車がどこで何時から観光ぶっつけを予定しているのか、全部で何か所で何回観光ぶっつけが行われるのかは当然頭の中に入れた上で山車を運行しなければならないのだ。

観光ぶっつけの予定がないならば、すぐに薬師堂参拝に行けるかといえば、そうではない。薬師堂は夜中の 12 時で閉まってしまうため、それまでに参拝を終えなければそこまでの移動が無駄になり、翌日もう一度同じコースを通らなければならなくなる。前に何台の山車が薬師堂参拝に向かっているか、そして反対から山車は来ていないのか、参拝を終えた山車は次は何を目標にしているのか、反転して戻ってくることはないのか、考えなけれ

写真３　作戦板と相談

丁内の区分を確認し、山車の位置をリアルタイムで動かしながら、自らの山車の次の行動を考える。

ばならないことはたくさんある。

薬師堂参拝の時間だけが問題ではない。8 日のうちに薬師堂参拝を終えてしまえば自由に運行することは可能になるのだが、その一方で要素、目的を達成し終えてしまえば山車は下り山となってしまうため、上り山と対峙した時は相手に優先権がある不利な交渉をしなければならなくなる。それでは自由に曳き回しをして、望みの相手と対峙できたとしても交渉で負けてしまうかもしれない。

もろもろの条件を考え、薬師堂参拝は明日にすることとし、観光ぶっつけもないとしたら、次に何を考えるだろうか。まだ夕方であり、こんな時間に山車を納めてしまっては何のためにお祭りをやっているのか分からないし、そんなことでは若者に不満が溜まってしまうだろう。とはいえ、何の目的もなくふらふらと曳き回しをしていても面白くないし、これまた若者が山車を離れてしまう。よし、8 日のうちに本番をやってしまおう。そうすれば、9 日は慌てて相手を探さなくてもあぶれて祭礼期間中に一度も本番ができなくなるという心配がなくなり、薬師堂参拝を終えてから本当に因縁のある相手を狙うことだけに集中できる。9 日の夜になればどの山車も参拝を終えているだろうから、こちらだけ下りという不利な条件での交渉もなくなるだろう。

狙う相手はどこにするのか。長年の因縁がある山車か、昨年あやをつけられた山車か、勢いをつけて強敵を目指すのか、8 日であるということを踏まえてある程度本番をやりなれた山車にするのか、状況によってはこれまで 1 度も本番をしていない山車を相手にすることもできるかもしれない。

では、狙っている山車はどこにいて何をしようとしているのだろうか。薬師堂参拝は終えたのか、観光ぶっつけはあるのか、あるとすれば場所と時間はどうなっているのか。観光ぶっつけ後はどのように動くのだろうか。

こうしたことを探るために小、中学生の斥侯が町中を走り回り、携帯で電話し情報を集める。そうこうするうちに、1 回目の観光ぶっつけの始まる時間になってくる。こうなると観光ぶっつけが終わるまでの間はどこの山車も動きを止めるだろうから、今のうちに夕食をとることにしよう。そうすると、停止する場所は、位置は、向きはどうした方がいいのか、綱はどの程度の長さにするのか、といったことも決定しなければいけない。休憩の時

は張番に山車を預けて完全に休憩するのか、いつでも動けるようにするのか、そこも難しい問題である。

夕食をとりながら集まってきた情報をもとに観光ぶっつけ終了後の各山車の動きを予想し、狙っている相手と向かい合える地点を考える。そこの丁内が一度通過したところだとすると張番に見せるという理由がないので上り山としてふるまうことができず、不利な条件での交渉になってしまう。また、途中に因縁のある丁内の山車がいれば、相手が本番に持って行こうとするかもしれず、そうならなかったとしてもあやをつけるためにわざと長い交渉に持ち込まれ交差に時間がかかってしまうことになる。

相手と向かい合える場所とそこまでのルートだけでなく時間についても考えなければならない。うまく相手と向かい合えたとしても、そこから本番に至るまでには長い交渉が行われる。本番が始まれば数時間はかかり、うまく本番を終えたとしてもその後の本当の本番とも言うべき交差についての交渉を行わなければならず、それを終えた後に次は帰り道について考えなければならない。かつては朝日が昇ってからから本番を開始したこともあるというが、現在は警察の時間規制もうるさくなり、夜中になってから本番を開始するには相当な決意が必要となる。もし本番が始まるならば、そのために道具を準備し、運んで来なければならないので、その時間と道具の隠し場所についても考えなければならない。さらに、本番が盛り上がっている時には手伝いの人なども多いが本番が長引いた際には、山車をほどく時や帰り道には中心となる若者しか残らないということも多々ある。無事に丁内へ戻り、山車を収めるまでが山曳きであるし、ましてまだ 8 日で、明日も 1 日祭礼は行われる。

このようなことを考えたうえで、責任者は山車がどこに向かうのかを決断する。しかし、責任者が決断しただけで山車は動くわけではない。若者の合意を得ず自分勝手な判断を繰り返せば若者の支持を失い、きちんとした山曳きができなくなってしまうこともありうる。様々な場面で助言や情報をくれる OB の顔も立てなければならず、張番にいる丁内の長老方の意見も無視することはできない。何か問題が発生した際に責任をとるのが責任者の役割なのだから、常に冷静な判断を下し安全を考えなければならないが、それだけでは若者の望むいいお祭りはできない。時間はどんどんと過ぎ、他の山車が動き出せば状況も変わってくる。

責任者が決断を下すと「若い衆綱さつけ」と掛け声がかかり、ゴミなどが片付けられ、綱がのばされ、囃子のリズムが変わる。そして、山車は動き出す。

4.2　誰が為に山車は？

さてこの場合、誰が為に山車は行く、のだろうか。建前上は、神様、仏様、殿様、お客様のために動いているように見え、また、そのように語られる山車ではあるが、そこにはもう 1 つの要素である本番が想定されている。そのために毎年山車には改良が加えられ、新しい戦法が考案され、遠い地域から多くの若者が集まってくるのだ。

とはいえ、本番はあくまで交渉の結果でしかなく、そこに至るまでに、誰かの為に山車が動き出すためには、様々な要素が複雑に絡み合っている。他者としての、思考し行動する存在としての他の山車が存在し、それ以外にも、若者、OB、長老、警察、時間、場所など、誰が為に、の主語はめまぐるしく変化していく。さらに、その年 1 年だけで角館のお祭りは完結するわけではなく、長い祭礼の歴史の積み重ねによって、その裏には参加した無数の誰かの存在によって、今この瞬間の山車の動きが決定される。この膨大な数の誰かの為に、山車は行くのである。

5　おわりに

本稿では、角館のお祭りについての基本的な要素について、誰が為に山車は行く、のかという視点から整理した。角館のお祭りについてはまだ調査が足りておらず、研究は始まったばかりである。今後とも調査を続け、角館のお祭り、そしてそこから見えるものについて研究を続けていきたい。

最後に筆者を角館へと導いてくれた坪郷英彦先生に感謝の言葉を述べたい。坪郷先生とは平成 20 年の八王子祭の調査において初めてお会いして以来のお付き合いとなる。民具研究から展開された民俗を物質から見る視点は筆者に欠けているものであり、大変刺激を受けたことを記憶している。

その後の坪郷先生との記憶はそのほとんどが角館と密接に結びついている。平成 22 年の八王子祭の調査の際に、角館のお祭りの調査にお誘いいただき、その年から角館の調査に同行することとなった。角館では故高橋雄七氏をご紹介いただき、氏の全面的な協力のおかげで角館において有意義な調査を続けることができている。高橋雄七氏にしっかりとした成果をお見せすることができなかったことが悔やまれるが、この場を借りて氏と氏をご紹介くださった坪郷先生にお礼を申し上げたい。

坪郷先生とお会いし、角館という新しい世界を開いていただいたことは私自身の研究、また人生にとって貴重なものとなった。坪郷先生はご退官後もご自身の研究を発展させていかれることを信じている。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

［注］

1) 中村芙美（1971）、小西健吾（2007）など、それぞれ視点は異なるものの角館のお祭りを事例に優れた研究を残している。

2) 参加者の立場から角館のお祭りについて詳細な記録を残したものとして今野則夫（1991）の著作がある。筆者は角館においてある丁内の山車を曳き参与観察を行っているが、この著作の長年の責任者経験に基づいた記述には臨場感と説得力があり、角館のお祭りについてこれ以上の記述をすることは難しいと思われる。本稿での参加者の立場とは、祭礼を伝統的権威や運営者側からみるのではなく、山車を曳き回す 1 人 1 人の参加者側からみるというものであり、そこから明らかになるものについて考える立場を指すものである。

3) 以下の角館のお祭りの歴史に関する記述は、『角館誌第四巻　北家時代編下』、『角館誌第五巻　明治時代・

大正時代編』、『角館誌第六巻　昭和時代編・角館歴史年表』、『角館祭りのやま行事　角館のお祭り』、『角館祭りのやま行事報告書』をもとに整理した。特に必要と思われる部分については個別に引用を行った。

[4] 交渉やそれを解釈するルールは角館のお祭りにとって最も重要なものの 1 つであり、それについては中里（2015）で論じた。

[5] 公式の目的を有している山車を上り山、それを持たない山車は下り山とし、交渉において上り山に優先権があるとされている。とはいえ、神明社参拝、薬師堂参拝以外の目的を公式のものとするか、張番に見せに行くのを上り山と判断するか、など丁内ごとにその基準が異なり、その解釈を巡って交渉が白熱することとなる。

[6] 道具とは本番を有利に運ぶために用いられるもので、山車に取り付けられたり、車輪廻りに用いられたりする。山車ごとに工夫が凝らされ、特徴があるものとなっている。

［参考文献］

角館誌編纂委員会　1969　『角館誌第四巻　北家時代編下』

角館誌編纂委員会　1973　『角館誌第五巻　明治時代・大正時代編』

角館誌編纂委員会　1975　『角館誌第六巻　昭和時代編・角館歴史年表』

角館のお祭りの保存継承と地域活性化実行委員会　2016　『角館祭りのやま行事　角館のお祭り』

角館町・観光協会・祭典伝承委員会編刊　1985　『角館の祭典』

角館町教育委員会文化財課　1997　『角館祭りのやま行事報告書』　角館町教育委員会

小西健吾　2007　「興奮を生みだし制御する：秋田県角館、曳山行事の存続のメカニズム」　『文化人類学』72

今野則夫　1991　『お祭り一代記・祭りを駆けた男』

中里亮平　2015　「曖昧さと厳格さ - 角館のお祭りにおけるルールに関する研究 - 」　『祭礼における「暴力」の発生と解決の民俗学的研究　報告書』

中村芙美　1971　「町と祭りー秋田県角館町の飾山はやしの場合ー」　『日本民俗学』77

四十年記念誌編集委員会　2005　『北部丁内若者　曳山四〇年記念誌』

所属：長野大学非常勤講師

E-mail アドレス：hige_nakazato@yahoo.co.jp